

平成22年4月6日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18520232
 研究課題名（和文） 近現代英米文学における環太平洋異文化表象の思想史的研究
 研究課題名（英文） A Historical and Theoretical Study of Representations of Pan-Pacific Cultures in Modern British and American Literature

研究代表者
 新井 英永 (ARAI HIDENAGA)
 大阪府立大学・人間社会学部・准教授
 研究者番号：00212598

研究成果の概要（和文）：

本研究は、その初期の小説と異なり、D・H・ロレンス（1885-1930）の後期小説の舞台の多くがイギリスではなく、イタリアやオーストラリア、アメリカ合衆国、メキシコに設定されており、極めてグローバルな視座を提供していることを明らかにしている。実際、これらの小説は、環太平洋地域の文化や社会の表象にまつわる諸問題を理解するために、非常に重要な役割を果たす可能性を持っている。

研究成果の概要（英文）：

This study shows that unlike his early novels much of Lawrence's later fiction takes place not in England but in places such as Italy, Australia, the United States and Mexico: they provide us with quite global perspectives. It seems possible indeed that problems pertaining to the representations of cultures and societies of the circum-Pacific region can be understood using these novels as a starting point.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：D・H・ロレンス、批評理論、脱領土化／再領土化、群衆、アジア、優生学、セクシュアリティ、ポストコロニアリズム

1. 研究開始当初の背景

英国のモダニズム作家 D・H・ロレンス (1885-1930) がヨーロッパとアメリカ合衆国を舞台として書いた『セント・モア』(1925) を注意深く読むと、この小説が「アジアの中心」を大西洋のみならず太平洋をも超えて全世界を覆う悪の洪水の起源として表象していることから、このテキストは同時代の他のテキストと黄禍や汎モンゴル主義への危機感を共有しており、当時のアメリカの恐怖をヨーロッパの恐怖へと重ね合わせたテキストであることが分かった。その一方で、悪の指示対象が変遷しているため、アジアの脅威を声高に主張する諸著作と、その脅威を自らのテキスト内で脱構築している『セント・モア』との差異を無視できないことも分かった。同様のことがロレンスの他のテキスト、あるいは他の作家にも当てはまるのかどうか、差異があるとすればそれをどのように理解すべきかといった観点から、より広い文脈でアジア表象を検討し、それを環太平洋表象分析へと接続してみようと考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、近現代英米文学において環太平洋諸国あるいはそこに住む人々が、欧米植民地主義・帝国主義等を背景にどのように表象されてきたのかを文学・思想史的に解明することにより、今後の英米文学・文化の一層の理解、さらには環太平洋地域における有意義な文化・社会的交流のための視座を提供することを目的とした。

3. 研究の方法

社会・科学的言説と文学テキストとの関係を探るときの理論的枠組みとしては複数のレベルの言説の相同性を分析し新歴史主義の出発点となったミシェル・フーコーの研究を、環太平洋を中心とした異文化表象分析の枠組みとしてはフーコーの理論に触発されこれまたポストコロニアル批評の出発点とな

ったエドワード・サイードの研究をたたき台とした。また、植民地主義や帝国主義を踏まえつつ D・H・ロレンスを含む英米作家による様々な「旅」のあり方を分析・評価するドゥルーズ＝ガタリの著作も参照した。さらに、モダニズムを論じる場合や、19世紀から20世紀への時代の移り変わりを問題にする場合には、1920年代アメリカの主要なテキストを「ネイティヴィスト・モダニズム」の言説と定義したウォルター・ベン・マイケルズ『われらのアメリカーネイティヴィズム、モダニズム、プルーラリズム』をたたき台とした。

4. 研究成果

英国のモダニズム作家 D・H・ロレンスの後期小説、とりわけ環太平洋地域を舞台とした小説を、批評理論ないし現代思想と共鳴あるいは対話、場合によっては対立させることにより、それぞれのテキストの新たな読解を提出する試みを、平成20年度に日本語による一冊の単著『D・H・ロレンスと批評理論——後期小説の再評価』(国書刊行会)にまとめることができた。第一章では、ロレンスの代表作とされる小説『恋する女たち』を扱い、ルネ・ジラルの欲望理論を援用することにより新たな読解を目指した。第二、三章は、『アーロンの杖』を扱い、小説の有機的統一といった観点から再評価することが不可能であること、ならびに全体主義的傾向も自己解体していることを論じた。また、ドゥルーズ＝ガタリの「脱領土化／再領土化」という概念に着目することにより、二人の主人公アーロンとリリーの関係性を新たに捉え直した。第四章では、『カンガルー』における群衆の概念あるいは表象の意味と機能を、同時代の社会的言説等との比較を通して明らかにした。第五章は、『セント・モア』における「アジアの中心」という表象が具体的にはタタール地方を指す可能性が高いことを示したうえで、この表象が悪の起源とされていることに注目し、当時の英米における黄禍や汎モンゴル主義への危機感と『セント・モア』との関係を検討した。第六章は、『セント・モア』

における自然と文明の概念を再考し、このテキストの提示する破壊的創造という優生学的ヴィジョンを分析した。第七章では、ラカン/ジジェクやウォルター・ベン・マイケルズ concepts を参照し、『セント・モア』における「アジアの中心」という表象は、イギリスとアメリカを一時的に結ぶ媒体であることを主張した。第八章は、ナチズムやポストコロニアリズムも視野に入れつつ、『羽毛の蛇』における性の表象をミシェル・フーコーが引用した主人公ケイトの言葉を出発点として考察した。

F・R・リーヴィスの序列化以降高く評価されることがなく、1980年代まではほとんど論じられていなかったロレンスの後期作品群を取り上げるものの一つの意義は、これまで「性の解放と自然への回帰を称揚した生命主義者」と時に単純化されてきたD・H・ロレンス像を修正することに認められる。具体的には、後期小説群の中でも、オーストラリアを舞台とする『カンガルー』やアメリカ合衆国南西部を舞台とする『セント・モア』、メキシコを舞台とする『羽毛の蛇』等に顕著なように、後期ロレンス作品はグローバルな性格を持つ。イングランド以外を舞台とするこれらの小説を再評価することにより、より広いグローバルな視野、具体的には環太平洋異文化表象という視座からロレンスを捉えることが可能になった。今世紀に入ってから批評理論の援用により新たな批評パラダイムへの移行を提唱している研究や、(ポスト)コロニアリズムを踏まえた研究等、後期小説の問題点から目をそらすことなく積極的再評価を試みるという意味で本研究と共通点の多い試みがなされるようになってきた。ただし、それらの研究においては、啓蒙的であるために具体的な作品分析における説得力や斬新さに欠ける嫌いがあったり、後期ロレ

ンス作品の旅の特徴の解明を主眼としているもののアメリカ合衆国の社会的言説が軽視され環太平洋地域の一環としてのアジアが依然として盲点になっていたりする。批評理論の解説よりもそれを援用し、これまでの定説や解釈を疑問視したり新たな見方を提示したりすることに力点が置かれた本研究は、グローバル化する現代における日進月歩のロレンス研究あるいは英米文学・文化研究のみならず、それらの枠を超え様々な学問の場における今日的議論の一層の進展・活性化に寄与すると考えられる。

平成21年度には前年度に出版した上述の著書を英語による博士論文にまとめた。内容的には、日本語著書と大きく変わらないが、『セント・モア』における自然と文明の概念を再考した第六章、ならびに『セント・モア』における「アジアの中心」という表象の媒体的機能を検討した第七章は、割愛せざるをえなかった。海外の雑誌への投稿を目指し、いずれ英語論文として練り直したい。ただし、雑誌の場合には部分的な成果発表にしかならないので、この二章分の英語版を博士論文に加えた一冊の英語著書としての刊行も視野に入れたい。ロレンスの著作の研究と並行してロレンス以外の作家の研究も推進したかったが、十分な成果を上げることができなかった。ロレンスの集中的な研究により展望は開けたので、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①新井英永、過剰なる生と認識の悲劇としての『息子と恋人』——「オイディプス」からの逃走、*Kanazawa English Studies*、査読有、Vol. 27、2010

②新井英永、D・H・ロレンス『羽毛の蛇』をめぐる近年の一批評動向——セクシュアリ

ティ、ナチズム、ポストコロニアリズム、
『言語文化学研究 英米言語文化編』（大
阪府立大学）、査読無、Vol. 2、2007、pp.
37-56

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 3 件）

- ① Hidenaga Arai、博士論文（東北大学）、*D. H. Lawrence and Critical Theory: A Reevaluation of the Later Novels*、2009、177
- ② 新井英永、国書刊行会、*D・H・ロレンスと批評理論——後期小説の再評価*、2008、206
- ③ 新井英永、慶應義塾大学出版会、*D. H. ロレンスとアメリカ／帝国*、2008、209-37

〔その他〕

ホームページ等

http://www.human.osakafu-u.ac.jp/staff/blue/b_arai_hidenaga/index.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 英永 (ARAI HIDENAGA)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00212598